

みんなのひろば

視点

身体の欠損部を補填修復するエピテーゼ、日本と欧米諸国では「認知度」「技術者の数」「保険制度」に関して大きな違いがあります。エピテーゼの存在は日本ではいまだ「特殊なもの」というイメージがとても強いですが欧米においてはごく自然に存在しています。

なぜこのような認識の差がうまれているか考えてみました。古くは紀元前古代エジプトの時代、出土したミイラからさまざまな材料を用いて製作された補填修復物(目、耳、鼻)が発見されています。

19世紀に入ると銀製のエピテーゼなどが製作されていたことが記録として残っています。この時代のエピテーゼは狩猟でのけがや戦闘の末に負った外傷に起因した欠損に対して製作されていたようです。19世紀後半には先天性の疾患による欠損への適用、19世紀末には腫瘍などの疾病に起因する欠損に対してのエピテーゼ製作が始まりました。これらの補填修復物に関する記録は全て欧米のもので、日本における補填修復の記録は1868年、下肢を失った当時人気の歌舞伎役者が舞台に立つことへの熱い思いから活人形師に義足製作の依頼をしたとあります。ですが、実用には至らず、後にアメリカ

力製の義足を装着し、再び舞台に立つたと言われている。このような歴史をみても日本と欧米のエピテーゼや義手・義足に対する認識、認知度の違いは明らかで



高崎市片岡町

けい こ 圭子

はぎわら 萩原

歯科技工士

後れ取る日本の支援策

ていると思います。技術者数はともかく、現在の日本におけるエピテーゼの品質は非常に良質です。日本人の器用さ、物づくりにかける思いが技術の向上につながっているのでしょう。

欧米では、補填修復物に対して製作費用の大部分が公的に補助されます。戦地での負傷によって身体に欠損を及ぼした場合はもちろん、交通事故やがんなどが原因でできてしまった欠損に対して公的な補助で賄えない費用をサポートする非営利団体もあります。近年におけるエピテーゼ製作の日本と欧米との大きな違いはここかもしれません。

日本のエピテーゼに対する認知度の低さ、不足しているサポート。基盤ができていない業界であるため乗り越えなければならぬ問題は多々ありますが、エピテーゼを提供する側、サポートする側、利用者の3者それぞれの相互理解が深まることでより良い未来が待っていることを願うばかりです。

ただ一つ言えることは、エピテーゼなどの補填修復物製作に携わる多くの技術者、医療機関が、欠損で悩まれている方々に満足のいく日常を過ごしてほしいと願う気持ちは世界共通でしょう。

【略歴】歯科技工士の傍らエピテーゼの技術を学び、2011年に萩原歯研・エピテーゼ製作室メディカルラボを開設。製作技術者の育成にも取り組む。高崎市出身。

欧米のエピテーゼ

はないでしょうか。

さらに認知度が低いということはエピテーゼの製作技術者も少なく、高度な技術も得られていなかったことも表し